

内田クレペリン精神検査の曲線類型及び 曲線動揺値の質問紙法による検討

藤 本 幸次郎*

Examination on type of curve and profile fluctuation value in Uchida-Kraepelin Psychodiagnostic Test by questionnaire method

Kohjiro FUJIMOTO

The present study has been conducted in order to examine whether the results of evaluation of Uchida-Kraepelin Psychodiagnostic Test (U-K test), i.e., the type of curve and the profile fluctuation value, represent the personality traits of individuals or not.

The study has been conducted on 373 university students. First, a U-K test was conducted on them, thereby, the types of curves and the profile fluctuation values were evaluated from work curves. Next, a Yatabe-Guilford Personality Inventory (YGI inventory) and a Todai Personality Inventory (TPI) were carried out on the students, thereby, the scores of the emotionality scale groups and the extroversion-introversion scale groups were obtained from the YGI inventory, while, the scores of the neurotic scale groups, schizophrenic scale groups, and antisocial scale groups were obtained from the TPI. Then, the interrelations among the types of curves and the profile fluctuation values in the above U-K test, the scores of two scale groups in the YGI inventory, and the scores of the three scale groups in the TPI were examined. The following results have been obtained through this examination:

1. No interrelation has been recognized between the type of curve and the five traits, i.e., emotionality, extroversion-introversion, neurotic, schizophrenic, and antisocial traits.
2. It is found that there is hardly correlation between the profile fluctuation value and the five traits, i.e., emotionality, extroversion-introversion, neurotic, schizophrenic, and antisocial traits.

The following conclusions may be drawn from the above results of the present study:

It may be safely said that the type of curve and the profile fluctuation value do not represent such personality traits as measured by personality inventory at all. As a consequence, there is no explaining that the degrees of emotional instability, schizophrenic and antisocial traits will increase as the type of curve advances from its typical curve to an atypical one and also as the profile

* 教養部

fluctuation value increases. Ultimately, careful consideration must be taken in the description of individual traits and the discrimination of groups with the types of curves and the profile fluctuation values.

問 題

内田クレペリン精神検査（U-K検査）の曲線類型^{1)・2)}は、個人の作業曲線が定型曲線に比べてどの程度ずれているかを観察して判定した型である。また曲線動揺値（P F 値）^{3)・4)}は、作業曲線の客観的判定を目的として考案された数量的処理法で、統計的に推定された期待作業曲線と個人の作業曲線のずれの程度を数値で表したものであり、曲線類型に概ね対応する。曲線類型は24種類あり、作業量段階ごとに高度定型より重度非定型に配列されている。曲線類型の心理学的意味について、外岡⁵⁾が心的活動性の均衡と偏りという言葉を用いて、一つ一つの類型に結びついた心的特徴と性格及び行動の総合傾向を解説し、個人の性格把握や採用試験時の不適格者の発見に利用できるようにしている。しかし、このような曲線類型による性格及び行動の言語的表現が妥当性のあるものかどうか、検討してみる必要があると考えられる。

本研究は曲線類型及びP F 値が性格特性を示し、定型から非定型に進むに応じて、またP F 値が高くなるにつれて、その特性の程度が強くなると言えるかどうかを検討するために行った。

方 法

実験1. 曲線類型と性格特性の関係を検討するために行った。大学1年生男子301名を対象に、先ずU-K検査を集団実施して、作業曲線より曲線類型を判定した。次に矢田部ギルフォード性格検査（Y G 検査）⁶⁾と東大版総性格検査（T P I）⁷⁾を集団実施し、Y G 検査より情緒性及び外向性-内向性特性の尺度群得点を、T P Iより神経症的、分裂症的及び反社会的特性の尺度群得点を求めた。そして分析の対象162名を選び、曲線類型によって特性得点の差があるかどうかを検定した。実験期間は平成3年6月12日～同9月6日であった。

実験2. P F 値と性格特性の関係を検討するために行った。男子の大学1年生301名及び4年生56名、大学院生16名の計373名を対象に、実験1.と同じ検査を実施して、P F 値と五つの特性尺度群の得点を求めた。そして分析の対象238名を選び、P F 値と特性得点の相関とP F 値の程度による特性得点の差を検定した。実験期間は平成3年6月12日～平成5年6月30日であった。

分析対象の選出 実験対象のうちから、次の項目に該当する被験者を選んで、分析の対象とした。

- (1) U-K検査について、①作業量がA段階以上であること。②確認事項の「心身状態」で身体的不調の訴えがないこと。③P F 値と大きく食い違う特殊曲線でないこと。④Y G 検査かT P Iのどちらかを受験していること。⑤Y G 検査かT P Iのどちらかの結果が採用になっていること。
- (2) Y G 検査及びT P Iについて、①Y G 検査の△回答数及びT P Iの無応答数が10%未満であること。②U-K検査の結果が採用になっていること。

結 果

実験 1.

(1) 対象162名のU-K検査の曲線類型別の人員分布は表1. の通りである。

表1. 曲線類型別人員分布

類型群	高度定型群					定型群			準定型群			非定型群			計
類型・符号	(a)	a	(a')	a'	計	(a'f)	a'f	計	(a'f)~(f(A))	a'f~f(A)	計	(f(A))	f(A)	計	
対象人員	16	4	17	13	50	33	37	70	5	21	26	5	11	16	162

(2) 曲線の類型を4つの類型群にまとめて区分し、各群のYG検査及びTPIの尺度群別平均値を求めたところ、表2. 及び表3. の通りとなった。

表2. 曲線類型群別のYG検査尺度群別平均値(粗点)

類型群		高度定型群	定型群	準定型群	非定型群	計
YG検査尺度群※		(49名)	(69名)	(23名)	(15名)	(156名)
情緒性尺度群	平均	43.0	41.1	43.5	44.7	42.3
	標準偏差	22.27	21.14	24.73	28.04	22.88
外向性-内向性尺度群	平均	62.9	61.3	65.7	65.0	62.8
	標準偏差	17.05	20.29	20.12	18.78	19.23

※情緒性尺度群 尺度D、C、I、N、O、Co。

外向性-内向性尺度群 尺度Ag、G、R、T、A、S。

表3. 曲線類型群別のTPI尺度群別平均値(偏差値)

類型群		高度定型群	定型群	準定型群	非定型群	計
TPI尺度群※		(50名)	(70名)	(26名)	(16名)	(162名)
神経症的尺度群	平均	51.8	51.9	53.4	50.4	52.0
	標準偏差	7.29	7.04	6.06	6.73	6.98
分裂症的尺度群	平均	54.9	54.1	55.2	53.8	54.2
	標準偏差	7.26	7.60	7.90	6.91	7.22
反社会的尺度群	平均	50.8	48.8	47.7	51.8	49.5
	標準偏差	7.24	6.67	5.08	9.37	7.06

※神経症的尺度群 尺度Dp、Hc、Hy、Ob。

分裂症的尺度群 尺度Pa、Hb。

反社会的尺度群 尺度As、Ma。

実験 2.

- (1) 対象252名のU-K検査のPF値の分布は表4.の通りである。作業量のA及び㊦段階別とYG検査及びTPIの対象別(内数)の分布を示した。

表4. U-K検査PF値の分布

P F 値	対 象				
	A 段階	㊦ 段階	計	YG 検査 対象(内数)	T P I 対象(内数)
2.0～2.8	0	2	2	2	2
2.9～3.7	2	5	7	4	7
3.8～4.6	4	6	10	7	10
4.7～5.5	9	11	20	11	19
5.6～6.4	6	21	27	20	26
6.5～7.3	11	13	24	15	23
7.4～8.2	9	11	20	14	17
8.3～9.1	12	12	24	13	23
9.2～10.0	8	6	14	7	14
10.1～10.9	7	4	11	5	11
11.0～11.8	9	8	17	11	15
11.9～12.7	4	4	8	4	8
12.8～13.6	6	3	9	5	9
13.7～14.5	7	4	11	7	11
14.6～15.4	5	3	8	6	8
15.5～16.3	4	3	7	5	7
16.4～17.2	2	0	2	2	1
17.3～18.1	2	1	3	2	3
18.2～19.0	2	0	2	1	2
19.1～19.9	2	0	2	1	2
20.0～20.8	2	0	2	0	2
20.9～21.7	0	0	0	0	0
21.8～22.6	2	0	2	1	2
22.7～23.5	1	0	1	1	1
23.6～24.4	3	2	5	3	5
24.5～25.3	1	0	1	1	1
25.4～26.2	0	1	1	1	0
26.3～27.1	1	0	1	1	1
27.2～28.0	2	0	2	0	2
28.1～29.9	3	0	3	3	2
30.0～	2	4	6	3	4
計	128	124	252	156	238
平 均	12.29	9.97	11.14	10.82	10.55
標準偏差	7.15	9.02	8.20	7.13	6.62

また参考のために表5.に同対象252名のU-K検査全平均作業量の分布をA及び㊦段階別に示した。

表5. U-K検査の全平均作業量の分布

全平均作業量	対 象			全平均作業量	対 象		
	A 段階	㊦ 段階	計		A 段階	㊦ 段階	計
41～45	12	0	12	86～90	0	4	4
46～50	27	0	27	91～95	0	3	3
51～55	39	0	39	96～100	0	2	2
56～60	42	5	47	計	128	124	252
61～65	7	22	29	平 均	53.3	71.4	62.2
66～70	1	42	43	標準偏差	5.47	8.22	11.39
71～75	0	27	27				
76～80	0	12	12				
81～85	0	7	7				

- (2) P F 値と Y G 検査及び T P I の尺度群別得点の相関係数を求めたところ、表 6. 及び表 7. の通りとなった。参考として Y G 検査及び T P I の単一尺度得点との相関係数も示した。なお、P F 値は正規分布しないので、P F 値の開平変換した値と尺度群得点の相関係数を求めた。

表 6. P F 値と Y G 検査尺度群別得点
の相関係数

Y G 検査 尺度群	対 象		
	A 段階 (85名)	㊤ 段階 (71名)	計 (156名)
情 緒 性 尺 度 群	0.333	-0.089	0.145
外向性-内 向性尺度群	-0.053	-0.048	-0.044
D	0.251	-0.096	0.112
C	0.203	-0.049	0.110
A g	-0.078	-0.168	-0.085
G	-0.151	-0.131	-0.162
R	0.018	-0.035	0.024

表 7. P F 値と T P I 尺度群別得点
の相関係数

T P I 尺度群	対 象		
	A 段階 (121名)	㊤ 段階 (117名)	計 (238名)
神経症的 尺 度 群	0.189	0.113	0.131
分裂症的 尺 度 群	-0.036	-0.014	-0.054
反社会的 尺 度 群	-0.035	-0.046	-0.032
D p	0.149	0.145	0.111
H b	0.121	0.061	0.082
A s	-0.037	0.008	-0.003
M a	-0.026	-0.062	-0.038
I n	0.167	0.075	0.132

- (3) P F 値の程度群別の Y G 検査及び T P I の各尺度群別平均値は、表 8. 及び表 9. の通りである。

P F 値の程度区分は、表 4. の P F 値分布により 31 パーセンタイル値以下 (6.9 以下) を低得点群、32~70 パーセンタイル値 (7.0~12.1) を中得点群、71 パーセンタイル値以上 (12.2 以上) を高得点群とした。

表 8. P F 値程度群別の Y G 検査尺度群別平均値 (粗点)

P F 値		低 得 点 群 (54名)	中 得 点 群 (55名)	高 得 点 群 (47名)	計 (156名)
Y G 検査尺度群	平 均	39.0	43.2	44.9	42.3
	標 準 偏 差	20.96	23.10	24.27	22.88
外向性-内 向性尺度群	平 均	65.2	61.0	62.2	62.8
	標 準 偏 差	17.36	19.05	21.11	19.23

表9. P F 値程度群別の T P I 尺度群別平均値 (偏差値)

P F 値 T P I 尺度群		低得点群 (80名)	中得点群 (87名)	高得点群 (71名)	計 (238名)
神 經 症 的 尺 度 群	平 均	49.7	50.6	52.3	50.8
	標 準 偏 差	6.62	6.40	7.03	6.75
分 裂 症 的 尺 度 群	平 均	55.2	54.9	54.0	54.7
	標 準 偏 差	7.30	7.68	7.54	7.53
反 社 会 的 尺 度 群	平 均	50.0	49.4	49.0	49.5
	標 準 偏 差	7.26	6.87	6.58	6.93

(4) 日本・精神技術研究所は、事例344名の資料にもとづいて、曲線類型に対応する P F 値の程度を公表している⁴⁾。その P F 値の程度別に Y G 検査及び T P I の各尺度群別の平均値を求めたところ、表10. 及び表11. の通りとなった。

表10. 曲線類型群に対応する P F 値程度別の Y G 検査尺度群別平均値 (粗点)

P F 値・類型群 Y G 検査尺度群		～7.0 〔高度定型群〕 (55名)	7.1～13.0 〔定型群〕 (61名)	13.1～20.0 〔準定型群〕 (26名)	20.1～ 〔非定型群〕 (14名)	計 (156名)
情 緒 性 尺 度 群	平 均	40.0	42.3	43.2	49.1	42.3
	標 準 偏 差	21.94	23.03	22.25	25.40	22.88
外向性－内 向性尺度群	平 均	65.0	62.0	59.9	64.5	62.8
	標 準 偏 差	17.23	18.81	22.50	20.42	19.23

表11. 曲線類型群に対応する P F 値程度別の T P I 尺度群別平均値 (偏差値)

P F 値・類型群 T P I 尺度群		～7.0 〔高度定型群〕 (81名)	7.1～13.0 〔定型群〕 (98名)	13.1～20.0 〔準定型群〕 (39名)	20.1～ 〔非定型群〕 (20名)	計 (238名)
神 經 症 的 尺 度 群	平 均	49.9	50.5	52.7	52.1	50.8
	標 準 偏 差	6.92	5.98	6.58	8.71	6.75
分 裂 症 的 尺 度 群	平 均	55.5	54.7	53.8	53.7	54.7
	標 準 偏 差	7.43	7.44	7.80	7.64	7.53
反 社 会 的 尺 度 群	平 均	50.0	49.2	49.1	49.4	49.5
	標 準 偏 差	7.20	6.68	6.21	7.91	6.93

考 察

この研究の対象は大学生であるが、U-K検査の受験者の中から、検査時の心身状態、Y G 検査及びT P Iの受験の有無等を見て、分析の対象を選んだので、自然な大学生集団ではない。対象の性質を曲線類型分布（表1）とP F 値分布（表4）によって見ると、日本・精神技術研究所の大学生集団や一般健常者集団のデータ⁸⁾よりもばらつきが大きく、比較的個人差の広い集団であると言える。しかし、㊦段階の集団はかなり個人差の狭い集団になっている。

そこで曲線類型及びP F 値と性格特性の関係についてである。ここに情緒性、外向性-内向性、神経症的、分裂症的及び反社会的という五つの特性（性格タイプと言った方が適切かもしれない。）を決めた。その理由は、これらの用語はU-K検査の診断的判定法において個人の性格を記述するためにしばしば用いられている多くの特性用語をよく代表するものであると考えたからである。まず曲線類型と性格特性の関係を見てみよう。10種の類型（表1）を高度定型群、定型群、準定型群及び非定型群の四つの群に分類して、群の間の特性の平均値（表2及び表3）の違いが有意であるかどうかを検定した。しかし、群による差は認められなかった。また非定型性の特徴を持つ準定型群と非定型群とを一つにまとめて、三群間での差も検定したが、やはり有意差はなかった。即ち、類型と特性の関係は認められなかった。言うまでもなく、類型が高度定型から非定型に進むに従って、情緒性等の特性が正常から次第に偏って来るとは言えないことが分かった。次はP F 値と性格特性の関係である。まずP F 値と特性得点との相関係数（表6及び表7）を見ると、すべての特性で「ほとんど相関がない」という結果が出ている。しかし、A段階の対象ではY G 検査の情緒性と単一尺度のD（抑うつ性）及びC（気分の変化）で「低い相関がある」ことが認められた。ところが㊦段階の対象は「ほとんど相関がない」となっている。それは多分㊦対象が等質的な集団であるためであろう。しかし、Aと㊦の段階という作業量の差（表5）によって出て来た結果であるかもしれないとも考えられる。なぜなら作業量は知能等の能力以外の抑うつ性を中心とした情緒性の特性によっても影響されると推測されるからである。次にP F 値の程度を低得点群、中得点群及び高得点群の三つの程度群に分けて、群間の特性の平均値（表8及び表9）の差を検定したところ、T P Iの神経症的特性だけにやっと危険率5%レベルで有意差が認められ、低得点群と高得点群の差も有意であった。しかし、この特性は前述した通りP F 値との間ではほとんど相関がなかったし、群による差も辛うじて認められたものであるから、P F 値の高い人は低い人に比べて、より神経症的であるとは言い難いように思われる。なお、P F 値と特性の相関のところで「低い相関がある」と出たY G 検査の情緒性、D及びCの特性について、Aと㊦段階の対象別に、群の間の平均値の差を検定して見たが、有意差はなかった。さらに日本・精神技術研究所による曲線類型に対応するP F 値の程度区分を取り上げて、その程度間の特性の平均値（表10及び表11）の差を検定したところ、程度区分による差がなかった。さらにまたY G 検査のプロフィール型（典型と準型のB、C、D、E型）及びT P Iのプロフィール型（平均型、下降型、中高型、スパイク型(B)）⁹⁾の間のP F 値の平均値の差も検定したが、プロフィール型による差は認められなかった。作業曲線型の客観的指標であって、曲線類型に対応するP F 値についても、性格特性との関係は認められなかった。ただP F 値と特性の関係を検討している過程で、P F 値は抑うつ性を中心とした情緒性の特性と少し関係があるのではないかと考え

られた。しかし、この点については作業曲線と密接な関係を持つ作業量と情緒性の特性との関係を調べて見ないと、はっきりしたことは言えない。

以上の通り曲線類型及びP F値と性格特性の関係は認められなかった。いくつかの作業曲線型については、性格上の特性と密接な関連のあることが報告されているのであるが^{10)・11)・12)}、個々の作業曲線を平均化し類型化してしまうと、その性格的意味が失われるのであろう。

要 約

内田クレペリン精神検査(U-K検査)の判定結果であるところの曲線類型及び曲線動揺値(P F値)は、個人の性格特性を表すものであるかどうかを検討するために、大学生を対象に、先ずU-K検査を実施して作業曲線より曲線類型とP F値を判定した。次に矢田部ギルフォード性格検査(Y G検査)と東大版総合性格検査(T P I)とを実施し、Y G検査より情緒性尺度群と外向性-内向性尺度群の得点を、T P Iより神経症的尺度群、分裂症的尺度群及び反社会的尺度群の得点を求めた。そしてU-K検査の曲線類型及びP F値とY G検査の二つの尺度群得点及びT P Iの三つの尺度群得点との関係を検討した。

その結果は、次の通りであった。

1. 曲線類型と情緒性、外向性-内向性、神経症的、分裂症的及び反社会的特性の関係は認められなかった。
2. P F値と情緒性、外向性-内向性、神経症的、分裂症的及び反社会的特性の間には「ほとんど相関がない」ことが認められた。

以上のことから、曲線類型及びP F値は、質問紙法形式の性格検査によって測定されるような性格特性を何ら示すものではないと言える。もちろん曲線類型が定型から非定型に進むに依じて、またP F値が高くなるにつれて情緒不安定、分裂症的、反社会的特性などの程度が強くなるというような説明は出来ない。従って、曲線類型やP F値による個人の性格記述及び集団弁別は、慎重でなければならない。

参 考 文 献

- 1) 内田勇三郎 1951 内田クレペリン精神検査法手引(改訂増補版) 日本・精神技術研究所
- 2) 外岡豊彦/監修 1973 内田クレペリン精神検査・基礎テキスト 日本・精神技術研究所
- 3) 柏木繁男 1975 内田クレペリンにおける解析的評価法 金子書房
- 4) 日本・精神技術研究所編 1972 内田クレペリン精神検査法の数量的評価法 日本・精神技術研究所
- 5) 外岡豊彦編 1955 内田クレペリン精神検査法曲線類型略解説 日本・精神技術研究所
- 6) 辻岡美延 1965 新性格検査法-Y-G性格検査実施・応用・研究手引- 竹井機器工業(株)
- 7) 肥田野 直 1967 T P Iテストの内容と実施について 学校保健研究、9巻1号、2-7.
- 8) 山田耕嗣 1990 内田クレペリン精神検査データブック 日本・精神技術研究所
- 9) 藤本幸次郎 1990 T P I研究-プロフィールの型について- 福井工業大学研究紀要、第20号、別刷、99-106.

- 10) 加藤正英・香川隆子 1959 クレペリン内田作業素質検査の曲線型のY G性格検査による検討－定型と中高型との比較－ 奈良女子大学文学会〔研究年報Ⅱ〕、127－170.
- 11) 藤本幸次郎 1974 クレペリン内田作業素質検査の上昇型曲線について－Y G性格検査による検討－ 適性研究、第8号、30－32.
- 12) 藤本幸次郎 1992 作業曲線における初頭努力とパーソナリティ特性の関連について 福井工業大学研究紀要、第22号（第二部）、69－77.

(平成5年12月16日受理)